慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 青年期における表出的特性について |
| Sub Title | On the trait of the expressionality in adolescence |
| Author | 鈴木, 淑元(Suzuki, Yoshimoto) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 1990 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990. ) ,p.37- 43 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0037 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 青年期における表出的特性について

# On the trait of the expressionality in adolescence

鈴　木　淑　元
*Yoshimoto Suzuki*

Changes of adolescence have been seen from the 1970's. These are named the expressionality which is a current trait. It is researched at the 1988 by using the questionnaires and the depth interviews in 606 male and female adolescences.

The results show the existence of the expressionality and the several features which are (1) following self desires, (2) prioritizing personal lives, (3) friends-centered behaviors, (4) surface interpersonal relations.

(1) following self desires: opinions and actions depend with "like or dislike" decisions like personal sensibility; and living pleasant and joyful only in the present.

(2) prioritizing personal lives: being satisfied with getting delicious foods, wanted things, much money, and only doing sports, interesting things; few interests and concers for politics, society, and community.

(3) friends-centered behaviors: floating in the group of friends; being slightly and comprehensively acquainted each other on talking, shopping, and making a trip.

(4) surface interpersonal relations: shifting behaviors according to interpersonal circumstances and being eager for self-interests.

## 1.　青年期の特徴の変化

青年期の特徴としては，以前より，次のようなものが言われている。「新しい誕生であり，疾風怒濤 (storm and stress) を連想させる(08)」時期であり，情緒的に不安定であり，第二次性徴に伴う生理的変化が背景として存在している。そこでは，自己に対する強い関心が見られ，自分とは一体だれなのかという自我同一性（03, 04）を確立するために，自我の矛盾・分裂・混乱に悩まされることになる。(14) そして，もう一方では，社会への関心が強くなり，社会・職場・学校など，すべての生活領域に対して，高い不満率を示しており (20)，また，自己および社会に対する認識が深まり，理想的な自己のあり方を追及するとともに，現実社会における矛盾を克服し，その沈滞を刷新しようとする情熱にかられる (15) 傾向があるとされている。

しかしながら，現在では，こういった傾向に変化が見られ，異なった相貌を呈し始めているようである。

林（09, 10）によると，現代の青年は「現象的に見ると単なる伝統回帰ではなくて，考えの筋道が異なって」きており，「旧来の日本人とは，同質な面を共有しながらも，まったく異質な価値観や感性をもっている。いわば，旧来の日本人にとっては，異邦人ともいえるような日本人である」としており，この変化は，1975年頃より見られており，それは「物事を判断するときに，古いか新しいか，遅れているか進んでいるか，伝統的か近代的かという尺度で測るという「伝統対近代」の価値観の崩壊であり，この物差しを，現代の若者たちは，特に努力したわけではなく，何とはなしに失って」おり，「「よいものはよい，いやなものはいやだ」という態度を，臆

面もなく表出している」としている。

千石（24）では，自分の欲求に忠実であることを，表現主義としており，「従来の物質的成功の価値観は，すでに満足に達しており，過去の価値体系にとって極めて重要であった「裕福」「保障」が当然のこととなってしまっている社会において，新しく生じてきた傾向・哲学であり，人間の経験の表面的な面に力点を置いており，表現的価値観」をもっているとしている。

加藤（16）は，現在では，青年期の意識は，「個人生活志向型が，社会生活志向型を，はるかに上回っており，生きがいを社会とのかかわりの中で求めるのではなく，個人生活，私的生活の充実の中に見出そうとしている。」そして「豊かな社会の一層の進行によって，感覚追求的で現状肯定的な態度が青年の一般的態度になっていると認めざるをえない。」そこでは，「私的，個人的生活のより高い充足を求めながら，社会に対しては，さめた目を向けるという特質」や「社会とのつながりを求めない生き方」が見られ，〝いま〟の自分の生活，〝いま〟の人間関係を大切にする生き方が支配的になりつつある」としている。

この変化は，縦断的比較をしている，数種類の社会調査（01，05，06，12，27，28）によっても確認されており，1970年代より見出され，次第に顕著な傾向になっているようである。

## 2.　表出的特性の諸様相

上記のような，青年期に於ける，新しい傾向を「表出的特性」として捉えることにする。尚，以前の青年期の特徴を「配慮的特性」（29）としているが，本論文では割愛することとなる。以後，表出的特性を「表出性」と略し，配慮的特性を「配慮性」と略して，表記する。

前者の様相として，次のようなものが仮定されよう。

第一には，自分の欲求に忠実に従い，表現し行動にいたるのであり，欲求を充足することに，最大の価値を見出すのである。建前には拘らずに，本音に拠るのであり，「「嫁の世話をする人情課長」に，どのような感情を持っていても，「さっさと帰るドライな会社」に5割以上が好感を示している。(09)それというのも，建前に拠れば好感を示さないはずであるからである。また，これは，表面的な保守化としても見られており，保守的な観念に拠るのではなくて，「その場その場の状況に最もふさわしい生き方を選択し」（16），都合よく振る舞い，自分が最も得をするには，どうすればよいかと計算をしており，個別性感覚とも，me イズムとも表現できるものである。そこでの判断基準は，「好きか，嫌いか」ということが中心となるのであり，主義・主張やイデオロギーといったような観念としての「タテマエ」をもとめるのではなくて，自分の生活に密着した具体的なもの（遊び，ファッション，品物，等々）をもとめるのであって，個人生活重視といえよう。

次には，友人志向を強く示す対人関係が見られる。友人の数は増大し(01，27)，何をするにも友達と一緒であり，おしゃべりをしたり，スポーツをしたりして，心地よく楽しむ（26）のであって，表面的な付き合い（01）であり，謂ば「群れている」と言えよう。対人関係について悩んだい困ったりすることが減少しており，エネルギーを，そういったものへは向けずに，自分にとって興味のあることや楽しいことだけに向けるように，切り換えている(shift) ようである。

そして，欲求充足を第一にしているので，一個の人間と関わるというよりも，欲求の対象となっている限られた部分との関わりが強く見られることになり，謂ば，半ば人間的であると同時に，半ばモノ的な関係であり，密接な二者関係ではなくて，小此木の云う「1．5項結合」(23) や，Winnicott の云う「部分対象」(30) との関係に類似している。

また，情緒の表われは自我親和的(ego-syntonic)であり，快感を志向しており，行動には衝動的な傾向が見られ，あまり躊躇することがないようである。異性関係でも積極的であり（11，17，19），現状を肯定して，「いまを楽しくやっていくのがいい」(01) のである。

以上のことより，心的構造として推測されるものは，同時にアレもコレもと関わるという，縦割りの構造であり，それぞれの心的局面が切り換わって対応している。これは，Kernberg の云う「splitting」(13) が，ゆるやかに適応的に機能していると考えられるが，笠原の云う「マイルドな分割」に相当するようである。異性への関わりでも，直接的に対象へと向かうという行動化 (acting-out) が強く見られ，欲求や願望を，早急に達成しようとする傾向が大であり，衝動的なのである。そこでは，欲求の満足を得られると楽しくなり，不快なことは，直に忘却されてしまうようである。そこで，このような諸特徴より，精神病理としての境界例を，表出性の背景として考えている。(29)

## 3.　質問紙調査 及 面接調査

**目的）** 表出性を，質問紙調査によって実証的に究明し，それの存在を示し，且つ，生活領域との関連を調査

し，深層面接によって，より内面を探究することにある。

方法）質問紙は，性格特性を調査するためのインベントリー（143項目）と，生活領域の項目とに分かれる。前者は，新たに作成した項目と各種の性格検査（07，21，22）より採集した項目に加えて，インタヴュー調査（12名）によって得られた項目から成っている。後者は，生活領域における興味・関心・満足感などを調査するための項目を作成し，時系列的変化を調べる（29）ために，既存の社会調査（01，12，27，28）と同一の項目も使用している。

被験者に関しては，青年期は，12歳から20代後半までに亙るのであるが，本調査では，Blos の云う後期青春期（late-adolescence）（02）に該当する，18歳～22歳までを対象としている。それは，この時期には，社会認識や人間理解への認識が深まり，自己を新しく意識し，混乱と動揺を経て，自己を再構成することより，それ故，心理・社会的に青年期の心性を顕在化している時であり，且つ，知能・理解の能力は十分に発達しており，調査内容に関して，適切に回答することが可能と考えられるからである。

被験者群としては，青年期を構成する多様な人々を調査することを目指して，私立大学文科系・私立大学理科系・国公立大学・短期大学・専門学校の，そぞれの学生を被験者にしており，606名（男性281名／女性325名）を対象として，1988年10月に実施した。（但し，就業青年に対しては調査が可能とならなかった。）

**結果）** a．表出性の構造を解明するために，5件法で回答している，143項目よりなるインベントリーについて，因子分析を行ない，4因子構造を抽出し，各因子を代表する項目として，次のものを検出した。

＊「－」は，その項目の意味を反対にして理解すること。

第Ⅰ因子：対人恐怖心性因子

| | 因子負荷量 |
|---|---|
| 異性の友人と，話ができない。 | 0.311 |
| 引っ込み思案である。 | 0.349 |
| 人との交際が，苦手である。 | 0.429 |
| 知らない人より，いくらか知っている人と会うときのほうが緊張する。 | 0.257 |
| 自然に，つきあえない。 | 0.519 |
| 二人きりでいると，相手を意識して，緊張してしまう。 | 0.383 |
| 自分が人から，どう見られているか，くよくよと考えてしまう。 | 0.601 |
| 友人と一緒にいるとき，顔がこわばったり，赤くなったり，緊張したりすることがある。 | 0.345 |
| 人と会うとき，自分の顔つきが，気になる。 | 0.418 |
| 以前から，よく知っている友人にも，なかなか，話しかけることが出来ない。 | 0.366 |
| 落ち込んでしまっても，何かをしなければならないと思うのだがすることができないことがある。 | 0.583 |
| いつも，クヨクヨしている。 | 0.728 |
| なかなか，人のいる場面になじめなくて，他の人との隔たり（ギャップ）を，感じてしまうことが多い。 | 0.545 |

第Ⅱ因子：境界例心性因子

| | 因子負荷量 |
|---|---|
| 異性の友人と，話ができない。 | -0.470 |
| 引っ込み思案である。 | -0.534 |
| 人との交際が，苦手である。 | -0.620 |
| 調子がよくなると，いきなり，いろんなことをやりたくなる。 | 0.270 |
| 一人でいるのは，さびしくて耐えられないことがある。 | 0.361 |
| 誰にでも親しさを感じてしまい，まるで長い間，つきあってきた人のように思えることがある。 | 0.446 |
| 楽しいことや，うれしいことがあると，すぐに，誰かに話したくなる。 | 0.537 |
| 自分のことを，相手から関心をもって，きかれるとうれえくなる。 | 0.432 |
| 自分の好きなことをしたい。 | 0.277 |
| 調形の良いときは，誰とでも仲良くなれる。 | 0.422 |
| 自分の気持は，自分のなかに留めておいて，あまり外に出したりはしない。 | -0.499 |
| 自分の話を，みんなが関心をもって聞いてくれているようだ。 | 0.469 |
| 自分のことを話しているのは，とても気持がいい。 | 0.374 |
| コンパなどで，みんなで騒いだりカラオケをするのは大好きで，いつもやっている。 | 0.503 |
| ファッションに興味があり，自分の身につけているものには，こだわるほうだ。 | 0.378 |
| 自分のことを，自分から相手に話し始めることが多い。 | 0.437 |
| 自分の考えや気持を，すぐに話したくなるほうだ。 | 0.506 |
| 自分の考えや気持ちといったような内面的なものは，自分のなかに大切にしてしまっておく | |

| | |
|---|---|
| ほうだ。 | -0.509 |
| コンパの席などでは，しらけないように，いろんな話をしたり，芸をやったりすることが多い。 | 0.474 |
| おもしろいことが最高だ。 | 0.297 |
| 気がつくと，その場に，すっかりなじんでいて，ピッタリとはまり込んでいる感じがするときがある。 | 0.468 |
| あまり考えずに，すぐに行動してしまうことが多い。 | 0.294 |
| 自分のことは，相手から，きかれるまで，黙っているほうだ。 | -0.470 |

第Ⅲ因子：配慮性積極因子

| | 因子負荷量 |
|---|---|
| 気分が，すぐに変わる。落ち着かない。 | -0.281 |
| 終ってしまったことは，すぐに忘れてしまう。 | -0.308 |
| 一人の人を好きになると，いつまでも思い続けているほうであり，いろいろと考えてしまう。 | 0.166 |
| 恋人とうまくいかなくなると，いつまでも，その相手に，こだわらずに次の相手を見るけるようにしている。 | -0.308 |
| 思いつきで何かをしたりすることが多い | -0.447 |
| よく考えてから行動することが多い。 | 0.223 |
| じっくりと考えてから，行動するほうである。 | 0.269 |
| ほしいものがあると，その場で，すぐに買ってしまうことが多い。 | -0.342 |
| 異性を，すぐに好きになってしまうが，関心がなくなるのもはやい。 | -0.482 |
| あまり考えずに，すぐに行動してしまうことが多い。 | -0.469 |
| すぐに好きになったり嫌いになったりする。 | -0.486 |

第Ⅳ因子：表出性積極因子

| | 因子負荷量 |
|---|---|
| 自分は，とても才能があり，どんなことでも出来そうに，思えるときがある。 | 0.125 |
| 自分のことは，何でも，自分一人で，できると思う。 | 0.156 |
| 将来，他の人から，尊敬されるような人間になるだろう。 | 0.292 |
| 人に，直接，言葉に表わさずに，または，直接，頼まないで，自分の要求を満たさせることができる。 | 0.196 |
| 勉強や運動について，自信を持っている方である。 | 0.218 |
| 気が弱い。意志が弱い。 | -0.202 |
| とても満足して，満ち足りている感じになることがある。 | 0.371 |
| 人生に目標を持っている。 | 0.317 |
| 何か一つのことに熱中するほうだ。 | 0.341 |

上記のような項目群より，各因子の性質を総合すると，次のようになる。

第Ⅰ因子：対人恐怖心性因子

対人緊張が強く，他者の評価が気になり，「半知り」の人が苦手で，顔が赤くなったりし，抑鬱の場合でも「しなければならない」と気にしており，観念的で横割りの心的構造が見られる。これらは，対人恐怖の心理に近接しているものである。

第Ⅱ因子：境界例心性因子

自分の感情を直接に表現したり，衝動的に行動へと移ったり，また，自他未分化の状態が見られ，孤独感や中心部分が何もないという空虚感が認められ，興味が頻繁に切り替わることより，acting-out タイプの境界例の心性に類似している。

第Ⅲ因子：配慮性積極因子

よく考えてから行動したり，一つのことを確実にやっていくとか，内面的なものを充実したり，価値のあることをしたいというように，慎重に，観念的に対処しており，そのような考え方で，積極的に (positive) ものごとに関わっている。

第Ⅳ因子：表出性積極因子

満足感が強く見られ，強い自信をもっており，自分の力で関わっていき，また，情緒的な対応を敏捷にすることができることより，明るく楽しく生活している。

第Ⅱ因子と第Ⅳ因子に，表出性の存在が認められており，前者には否定的な面が，後者には肯定的な面が描出されている。

第Ⅰ因子と第Ⅲ因子には，配慮性が描出されており，二つの特性が，併存していることが示されている。(配慮性についての考察は，(29) においてされている)

b．この因子分析の結果より，表出性尺度及配慮性尺度を作成する。表出性尺度に関しては，上記の第Ⅱ因子を代表する項目と第Ⅳ因子を代表する項目の，それぞれ

の反応値を加算し，この合成得点が大である方が，より表出性傾向が強く見られるように，変換している。

配慮性尺度に関しては，同様にして，第Ⅰ因子と，第Ⅲ因子の，それぞれの項目から，合成得点を作成している。

これ以降は，表出性尺度 (expressionality) は，「Eスケール」と表記し，配慮性尺度 (considerationality) は，「Cスケール」と表記する。

各尺度の基本統計量は，次ページのようである。

| | Eスケール | Cスケール |
|---|---|---|
| 平均値 | 87.8 | 81.0 |
| 標準偏差 | 17.9 | 14.7 |
| 最大値 | 145 | 125 |
| 最小値 | 36 | 33 |
| 相関係数 | -0.34 | -0.34 |

EスケールとCスケールとの相関は，「-0.34」ということより，逆相関が確実に認められる数値となっており，表出的特性と配慮的特性は，ある程度の相互に反する性質をもっていると言うことが可能である。

次に，表出性及配慮性が，生活領域の項目と，どのような関係にあるのか，ということを調査するために，ECスケールを作成した。

Eスケールの得点分布を，G-P分析の手法に従って，3分割し，得点に応じて，標本集団を上位群・中位群・下位群とした。そして，同様に，Cスケールの得点分布も，3分割を行ない，上位群・中位群・下位群に分割した。

さらに，Eスケールの上位群であり，且つ，Cスケールの上位群ではない標本を，ECスケールの「e」カテゴリーとし，また，Cスケールの上位群であり，且つ，Eスケールの上位群ではない標本を，ECスケールの「c」カテゴリーとして，ダミー変数としての性質をもつものとした。「e」カテゴリーの標本数は，176名で，「c」カテゴリーの標本数は，165名となり，差異は，10%以下である。

ECスケールと，生活領域の各項目との $x^2$ 検定を行ない，表出性群と配慮性群の表われ方の大小を検出している。

c．生活領域に関する項目について

1)　生活感情に関しては，

| | |
|---|---|
| みちたりた気持を感じることのほうが多い。 | 14.9% |
| むなしい気持を感じることのほうが多い。 | 20.5% |
| 両方ともに，同じくらい感じる。 | 46.2% |

となっており，本調査では，満足感が，むなしい気持よりも下まわっており，NHK調査（01）（満足感30%／むなしい15%）に反する結果となっている。ECスケールとの $x^2$ 検定では有意となっており，E群（表出性群）のほうが満足感をより多くのものが感じている。（満足感12.9%／むなしい気持4.7%）反対に，C群（配慮性群）では，むなしい気持を感じるもののほうが多い。（満足感4.4%／むなしい気持17.6%）

表出性での快感志向が，明確に認められ，配慮性では，抑制的であり，思い悩む傾向が見られる。

2)　次は，満足感の内容についてであるが，

| | |
|---|---|
| おいしいものを食べたとき | 42.4% |
| ほしいものが手に入ったとき | 58.9% |
| お金があるとき | 42.4% |
| 友人と話が盛り上がったとき | 54.5% |
| 仕事や勉強がうまくいったとき | 44.0% |
| 読書をして何かが得られたとき | 26.7% |
| スポーツや趣味など好きなことに打ち込んでいるとき | 50.7% |
| 社会的な活動をして，効果が上がったとき | 5.1% |
| 人のために役立っているとき | 19.5% |
| クラブやサークル活動などに打ち込んでいるとき | 20.1% |

となっており，「おいしいもの」・「ほしいもの」・「お金」と欲求充足による満足感が高い数値となっており，表出性への傾向を示している。次には，「スポーツ・趣味」・「友人」が多く見むれ，友人志向が，他の調査と同様に，支持されている。

そして，「人のために役立つ」は，一様は，関心が見られるが，「社会的な活動」では，かなり低いものとなっている。

社会的への関心は低く，個人的な快さを追い求めている傾向が見られる。

また，「仕事・勉強」・「読書」・「クラブ」といった従来から見られる配慮性の特徴も依然として見られており，現調査時点（1988年）は，両傾向が混在している状況のようである。

3)　次は，生き方や暮らし向きに関してであるが，

| | |
|---|---|
| 経済的に恵まれなくとも，気ままに楽しく暮せばよい。 | 56.9% |
| 世間の目など気にせず，好きな人生を送るのがよい。 | 76.7% |
| 自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが，本当に人間的な生き方だ。 | 48.0% |
| いろいろなことを手際よくこなして，いろいろな体験を楽しんでやっていくのがよい。 | 88.1% |
| 自分のなすべきことを熟慮してそれに深く関わることが必要だ。 | 75.3% |
| 家族がうまくいくためには，自分の気持を抑えるべきである。 | 43.8% |
| 古いものは，長い間ずっと受け継がれて残ってきたという良さがあるのだから，できるだけ残すべきである。 | 72.0% |
| 自分のことを考える前に，他人のことを考えることが必要だ。 | 72.5% |
| 将来のために努力するよりは，毎日の生活を楽しくやっていったほうが良い。 | 45.5% |
| 自分は「狭く深く」型人間というよりは，「広く浅く」型人間だ。 | 52.5% |

となっており，ここでは，両傾向の混在が見られている。「好きな人生」・「いろいろな体験」が8割を占めて，多数意見となっており，さらに，「毎日の生活を楽しく」・「広く，浅く」が約半数であり，現在を中心にして，表面的に多方向に関わっている傾向が示されている。また，「気ままに楽しく」・「欲望に忠実に」も，かなりの回答が見られ，欲求を中心にして行動していることが窺われる。このように，表出性の傾向が，強く見られる。

しかし，その一方では，「熟慮」・「自分を抑える」・「他人のことを考える」にも，半数以上の回答があり，以前の行動様式（配慮性）も，確実に存在していることが表われている。

「古いもの」が高くなっていることより，表面的な保守化傾向が他の調査と同様に見られている。

4)　社会への満足では，

| | | E群 | C群 |
|---|---|---|---|
| 満足している。 | 48.8% | 28.3% | 18.2% |
| 不満である。 | 51.1% | 23.0% | 30.6% |

となっており，「満足」と「不満」は，それぞれ半数を占めているが，ECスケールとの $x^2$ 検定では，有意となり，「満足」は，E群のほうが多く見られ，「不満」は，配慮性のほうが多い。ここでも，両者の差異が認められており，快感志向が見られる。

5)　友人関係では，

| 0人 | 1人 | 2人 | 3人 | 4人 | 5人 | 6人以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5.1% | 8.4% | 15.5% | 22.6% | 9.6% | 18.3% | 15.6% |

であり，親友としては，3人が最も多く，次いで5人となっており，人数の増加傾向を支持している。1985年の生活と価値観調査では，5人は16.0%となっており，さらに増加が本調査では見られる。

友人との付き合い方では，

| | |
|---|---|
| なるべく相手の考えに反対しないし，自分の考えに反対されるのも嫌だ。 | 40.9% |
| 人生いかに生きたら良いかなど，むずかしい話はしないようにしている。 | 23.1% |

のように，広く浅く付き合うという，表面的な対人関係が見られる。

また，考え方でも，

| | |
|---|---|
| みんなが同じようなものの考え方や見方をしている。 | 31.5% |
| たいていの人は，マスコミの情報に動かされているよう気がする。 | 73.9% |
| 少数意見を主張したり，人と違う生き方をするのは，むずかしい。 | 69.5% |

としており，みんなに合わせてしまうという，その場での割り切りの良さが示されている。

次には，友人との行動であるが，

| | |
|---|---|
| 旅行に行く。 | 41.1% |
| お茶を飲んだり，軽いおしゃべりを楽しむ。 | 87.0% |
| スポーツをする。 | 43.2% |
| お酒を飲みに行く。 | 55.3% |
| 街をブラブラ歩いたり，買い物をしたりする。 | 60.6% |
| まじめな議論を，互いにする。 | 31.7% |
| 悩みごとの相談をする。 | 50.2% |

となっており，「おしゃべり」・「ブラブラ歩き」・「お酒」・「スポーツ」が多く見られ，何をするにも友達と一緒というようであり，群れつどって楽しくなるという，群遊性とでもいうべきものが見られる。しかし，「悩みの相談」・「議論」も，かなり見られ，以前の特徴が，共に存在しているようである。

**考察)**

青年期における新しい傾向としての，表出性は，その存在を確認することができた。

また，以前の特徴を備えている群(配慮性)も存在し，現在は，両群が併存している状況が，明らかにされた。

表出性を備えた群の青年像としては，次のように言えよう。

自分の興味・関心に忠実であり，その欲求を充足することに価値をおいている。自然に，自らの「好きか嫌いか」という個別性感覚をもっており，個人生活を優先している。それ故，政治や社会への関心は，薄いものとなっている。

現在の生活に満足感をもっており，現在の生活を中心に考えており，スポーツ・旅行・おいしいもの・ほしいものに喜びを見出しており，快感志向が見られる。

友人とは，広く浅く，多人数とつきあう。友人志向は強いが，おしゃべりをしたり，ブラブラ歩いたり，スポーツや旅行をしたりして，共にいることに意味があり，群遊性が見られ，表面的な対人関係が窺われる。

**付記)** 本論文は，修士論文より，一部を取り出して整理したものです。それの作成にあたり，山本和郎教授の御指導に感謝をいたします。また，協力していただいた被験者の方々に，御礼を申し上げます。

## 参 照 文 献

01) 荒井宏祐・謝名元慶福：青年の意識15年，NHK放送文化調査研究年報，32，263，1987
02) Blos, P.: On adolescence, Free Press, 1962, 青年期の精神医学，野沢栄司訳，誠信書房，1971
03) Erikson, E. H.: Identity and the life cycle, Int. Univ. Press, 1959, 自我同一性，小此木啓吾訳編，誠信書房，1973
04) Erikson, E. H.: The problem of ego identity, Am. Psychoanal. Assoc., 4, 61, 1965, 自我同一性の問題，小此木啓吾訳編，誠信書房，1973
05) 古川正之・天野千春：若者がえがく『自画像』，放送研究と調査，37，2，22，1987
06) 古川正之・天野千春：社会・政治の“現状維持”を望む若い世代，放送研究と調査，37，3，48，1987
07) Gunderson, J. G.: Diagnostic Interview for Borderline Patients, 境界例診断面接質問紙，Cornell-Keio-境界研究グループ訳編，1981，1986
08) Hall, G. S.: Adolescence, D. Appleton and Company, 1904
09) 林知己夫他：第4日本人の国民性，出光書店，1982
10) 林知己夫他：日本人の心をはかる，朝日新聞社，1988
11) 林謙治他：10代姓娠の地域格差および経年的推移に関する一考察，民族衛生，50，3，131．1984
12) 門脇厚司他：第4回東京都青少年基本調査，東京都生活文化局，1986
13) Kernberg, O: Object relations theory and clinical psychoanalysis, Jason Aronson, 1976, 対象関係論とその臨床，前田重治監訳，岩崎学術出版，1983
14) 返田健：現代青年の生きがい，金子書房，1972
15) 加藤隆勝：青年期，誠信書房，1964
16) 加藤隆勝：青年期の意識構造，誠信書房，1987
17) 厚生省大臣官房統計調査部：優生保護統計報告，1988
18) NHK世論調査部編：現代日本人の意識構造，日本放送出版協会，1985
19) 日本性教育協会：青少年の性行動(第2回)，総理府青少年対策本部，1981
20) 松原治郎：日本青年の意識構造，弘文堂，1974
21) 小川捷之：いわゆる対人恐怖症における「悩み」の構造に関する研究，横浜国立大学教育紀要，14，1，1974
22) 小川捷之：他対人不安意識尺度構成の誠み，横浜国立大学保健管理センター年報，1，29，1981
23) 小此木啓吾：一・五の時代，筑摩書房，1987
24) 千石保：現代若者論，弘文堂，1985
25) 総理府青少年対策本部編：現代の青少年，大蔵省印刷局，1981
26) 総務庁青少年対策本部編：青少年と活力，大蔵省印刷局，1985
27) 総務庁青少年対策本部編：現代の青少年，大蔵省印刷局，1686
28) 総務庁青少年対策本部編：現代青年の生活と価値観，大蔵省印刷局，1986
29) 鈴木淑元：青年期における対人関係の変容，慶應義塾大学社会学研究科修士論文，1989
30) Winnicott, D. W.: Playing and Reality, Tavistock Publication, 1971, 遊ぶことと現実，橋本雅雄，1979